震災の中で教会を再発見する[1]

小平牧生

はじめに

筆者は、1995 年 1 月 17 日に兵庫県南部を中心に起こった阪神・淡路大震災の被災地域にある教会の牧師である。私たちの教会のある地域は最大震度 7 を記録した兵庫県西宮市南部に位置し、教会は震災直後に西宮市の指定避難所に指定された。同時にワールド・ビジョン・ジャパン、日本国際飢餓対策機構の現地事務所が置かれた。 当時筆者は近畿福音放送伝道協力会[2]の事務局長であり、また震災後に阪神地区にあるキリスト教会によって結成された「『We Love

[1] 本小論は 2012 年 4 月 16 日に行われた「日本福音主義神学会西部部会 2012 年度春季研究会議」における発題を土台としている。筆者は、阪神・淡路大震災の被災地域にある教会の牧師の立場から発題した。その研究会議のテーマは次のとおりである。
「神の国のホーリスティック宣教—東日本大震災をうけて：東日本大震災という現実の中で、教会がローザンヌ誓約などに表されているホーリスティック宣教をどのように理解し、どのように取り組んできたかを検証し、その取り組みの背景にある神学的理念を浮かび上がらせ、今後の教会の取り組みに対する神学的示唆を与える。」

[2] 近畿福音放送伝道協力会は福音放送伝道を目的とした教会協力団体であり、協力教会の範囲は近畿二府四県におよんでいる。阪神淡路大震災の被災地域全体がその協力教会の範囲に含んでいることもあり、震災後に日本福音同盟その他の団体によって結成された「阪神淡路大震災被災教会復興支援協力会」の事務局が同協力会内に置かれ、その実務を同実行委員会が担うこととなった。

阪神！』大震災復興ミニストリー」[3]の事務局を担当することになった。
2011年3月の東日本大震災においては、所属教団の東北教区担当理事、同時に日本福音同盟東日本大震災対策室の一員として被災地域の教会に対する復興支援活動に今日まであたっている。

Ⅰ．阪神・淡路大震災が問いかけたこと

阪神・淡路大震災は、筆者の人生、そして仕えている教会のあり方に対して具体的な変化をもたらした。 筆者は震災から二年余が経った1997年秋に一年間の休職期間を得て牧会の現場を離れた。振り返ると被災地域は復興への道を歩み出したばかりであり、責任が与えられていた「阪神大震災復興ミニストリー」の働きも継続している中であったが、社会も教会も復旧から復興に進んでいこうとしている中で、震災当初から足を止めることなく走り続けてきた自分の歩みをこのまま続けることはできなかった。あの出来事によって問われた「教会とは何か」という問い、そこには「教会は何を伝えるのか」「何をめざすのか」「どうあるのか」「何をするのか」という問いが含まれるが、それらの答えがなければ、教会形成の働きを続けることはできず牧師としての召しに応えて生きることはできない。そのためには、働きを止めて神と聖書の前に立つ時を持たなければならなかった。たとい見える状況が震災以前の状態に復旧したとしても、もはや震災以前と同じ歩みを繰り返すことはできなかったのである。

2011年3月に起こった東日本大震災の翌週、被災地に入りそこで繰り返す余震を経験した時、私は自分の心とからだでふたたび阪神・淡路大震災を思い起こした。それは自分のうちではすでに忘れていたことであった。そして、被災地を歩き被災地の教会を訪ねながら、自分がかつてあの阪神・淡路大震災に遭遇して何を考え、何を学んだのか、そしてその後どのように歩んできたのか、また歩んでこなかったのかを振り返ることになった[4]。

[3] 阪神宣教祈祷会を母体に結成された。震災復興活動の記録集として2001年1月に「苦しみにあったことは」、2005年9月に「主にあるものの幸せ」を発行した。
[4] 東日本大震災発生後に「クリスチャン新聞」2011年3月27日号と4月3日号の「オピニオン」欄に記事を求められた時、被害状況の全容がいまだ明らかになっていない中ではあったが、阪神・淡路大震災の経験から教会に与えられている希望と使命について記した。

本小論では、地域教会の牧師の立場から、阪神・淡路大震災の被災と復興の具体的な経験を通して福音宣教と教会形成について考えていることを論じたいと思う。

最初に、阪神・淡路大震災の復旧また復興の働きにおいて、その後の自分の人生と牧会の働きに対して問いを与えるきっかけとなったいくつかのできごとを記してみたい。

1．進入禁止区域に置かれた教会

当時、私たちの教会の礼拝出席者の半数以上は電車か自動車を利用して礼拝に出席していた。ところが震災後には電車などの公共交通機関は被災によって不通になるとともに、教会の周辺区域は「緊急指定車両以外の進入禁止区域」として制限された。そのために教会員は自動車を利用して教会に来ることができなくなった。教会はそのような状況の中に突然おかれたのである。

その中で、教会員の多くは一人で聖書を読み祈りの時をもって礼拝をささげた。しかしある人にとっては教会に行くことができないことは礼拝そのものを休むことであった。彼らは交通手段の回復を待って礼拝に再び出席するようになった。

ところが一方で、ある人々は被災した状況の中で互いに食物や衣類を分かち合い地域の人々と助け合った。彼らはともに集まり食事をしつつ励まし合い、ともに聖書を読み互いに祈りあった。その交わりは日曜日にかぎられずそこには家族やクリスチャンでない人々も含まれていたのである。

このできごとは二つの意味で筆者に気づきを与えた。一つは消極的な面であるが、教会員の信仰生活が教会堂での行事に集中しているという事実である。生活の場での信仰生活について強調してきたつもりではあったが、今回のように実際に教会堂に通うことができず牧師との連絡も取れないという状態になっ

た時、個人的な祈りの生活は保たれたとしてもそれ以上の信仰生活や働きは現実には中断する。それは、教会堂を前提にクリスチャンの育成や教会形成が行われて来たからであった。このことは、筆者自身のうちにも教会堂に人が集まるということを目標とする価値観や達成感があることを示した。

もちろん教会堂の持つ意義を否定するものではない。特に、教会堂が地域の人々の避難所となり、また地域コミュニティにとっての情報交換の場所になり、平常時は出入りしない人々が教会に出入りすることになった。緊急時において目に見える教会堂の存在も教会が地域に貢献できる重要な要件の一つである。

もう一つは積極的なことがらとして、教会堂に集まることができず牧師の働きを得ることができない中であっても、そこにいる信徒たちの集まりの中で教会としての働きが行われていたことである。その事実は宣教の可能性とともに教会の本質を知らされるできごとであった。福音は人から人に証しされ、愛のわざは人と人との関係を基盤にしたコミュニティにおいて行われる。それはプロジェクトとしてなされるのではなく、互いの存在と関係を基盤として行われる。危機の中で教会の生きた姿を見せられたのである。

2．牧師の燃え尽き[5]

前述のように、筆者は震災直後から被災地である阪神間の諸教会による復興支援の働きを負うこととなった。しかし、自らが被災者であり、教会に避難者やボランティアを受け入れながら、同時に被災地域にある諸教会を支援する働きを行うことは想像以上に重い務めであった。

阪神・淡路大震災当時は、携帯電話やインターネットは現在のように一般的に普及してはいなかった[6]。それゆえ情報の伝達に関してはそのスピードと量において東日本大震災の場合とは大きく異なっていた。また、震災後二ヶ月を経た時期に、いわゆる地下鉄サリン事件が発生し一般の視線はオウム事件に向け

[5] この項は、「百万人の福音」2011年8月号に記した記事をもとにしている。

[6] 当時はパソコン通信が利用されていた。筆者は1996年6月に行われた日本メディア伝道協議会主催のニューメディア宣教セミナーにおいて「阪神大震災におけるパソコン通信」についての調査結果を発表した。その記録は阪神宣教祈祷会発行の「苦しみにあったことは」106頁以降に記されている。

られてしまったことは、被災地の者に精神的に強いストレスを与えた。

当時の手帳をみると、「今日も礼拝説教の途中でわけもなく泣いてしまった」と書かれているのを見ることができる。たしかに半年位経った頃から、感情のコントロールのむつかしさを覚えるようになった。大阪や東京に行けば普通の生活があり、やがて被災地の教会の中にも日常生活に戻って伝道集会などを積極的に行う教会も出てきた。被災地の教会にも復興を競うような雰囲気が出て来た。うまく説明できないが、置いて行かれるのではないかという焦り、理解してもらえない苛立ち、思うように進んでいかない怒り、そして先が見えない不安などが自分のうちに満ちていたように思われる。

そのような状態にあった筆者にとって忘れられない二つの経験がある。その一つは、被災教会の状況を調べるために教会訪問を続けていた時のことである。交通手段の制限されている中での活動であり肉体の疲労は限界状態に達していた。訪問したその教会は不在であったために落胆を覚えた私に、教会の看板にしるされていた聖書のことばが目に入った。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人はわたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう。」（マタイ 11：28）

その聖句を見た瞬間、筆者はその場に膝から崩れてしまった。正直なところ自分に対して語られているみことばであるとは感じたことがなかった。しかし、疲れたからこそ主の招きに耳を傾けることができる。主のもとに行くことができる。そして疲れた者だからこそ主の安息を経験できることを知った。そこから回復が与えられ、続く復興支援の働きを進めることができた。

また、ある日一人の人が洗面器とタオルを持ってやって来た。「足を洗わせてください」と言うやいなや、私を座らせて私の足を洗い始めた。震災以降、「どのように他の人を助けるか」ということばかりを考えていた筆者にとって、自分が何かをしてもらう立場に立ったのは初めてであった。

クリスチャンとしてまた牧師として、「自分がしてもらう」ことより「だれかのために何かをする」ことが大切なことであると考えていた。しかしその結果は、燃え尽きと行き詰りであった。振り返ってみると、多くの人々が集い活発

な活動が行われる教会、疲れを知らない活動的な牧師、そういうものを思い描いていた筆者の生き方の基盤がいかに脆弱なものであるかを知らされた経験であった。

実際に阪神・淡路大震災では復興の働きの中で牧師が疲れて教会の働きが閉じられた例がある。先に教会堂のことを記したが、同じように責任と働きが集中している牧師が倒れたならば教会はどのようにして働きを続けることができるであろうか。このこともまた教会形成の課題の中で大きな問題意識となり、その後のチームミニストリーやセルグループでの相互牧会へと進んでいくきっかけとなった。

また、被災後のガウンも式文もない状況の中で行われた聖餐によって教会の復興への力を得たというある牧師の証[7]は、肉体の疲れの経験とともに、筆者にとって「からだ」についての関心を強くした。

3．支援と分かち合い

震災後、教会の駐車場には救援物資が山のように積まれるようになった。そしてそこに近隣地域や避難所から生活の物資を求めて人々が毎日集まって来る。

ある日筆者が人々の応対をしていると、一人の女性が歯磨きを探しておられたが残念ながら全てなくなってしまっていることがわかった。その時、私は牧師館の洗面所に買い置きの歯磨きがあることを思い出した。そしてそれを取りに行ってこの女性に差し上げたのであるが、その時に躊躇する思いが自分のうちにおこった。それは、筆者自身は被災者ではあったが自分たちのために支援物資を受け取ることをしないようにしていたからである。それはこれらの物資は地域の人々に与えられたのであり教会はそれをあずかっていると考えていたからである。それだけにまた自分自身のものを与えることには躊躇したのである。しかしその経験は支援と分かちあいについて考える機会となった。

災害時には被災地に多くの義援金と救援物資が届けられる。通常時には経験しないような金銭と物資の支援を受け、またその配布の責任と権限が教会に与

[7] 阪神宣教祈祷会「苦しみにあったことは」2001年1月、26頁

えられる。しかし教会にはそれを行うための準備や態勢は備えられていないことが多い。そのため特に牧師に責任が集中することになり、その難しさを覚えることも経験した。また多くのお金や物資の動く時には、人間の欲望がそこに働くことも現実の問題である。

たしかに被災直後の初期の救援段階には物資などの集中的な支援が行われなければならない。しかしそれは支援する側から支援を受ける側への一方的な働きであり、教会の本来の働きは自らに与えられたものを互いに分かち合うことなのである。それは一方的ではなく相互的であり、一時的ではなく継続的である。

筆者の関わりが与えられた働きにおいても、一方的な支援によって依存的な関係を造り出してしまった実例があった。救援段階における一方的な支援が大きければ大きいほど依存する関係を造りやすく、依存する状態から自立した状態に、そして相互依存の状態へと導いていくことは困難になることを知らなければならない。

Ⅱ．「キリストにある新しい共同体」である教会

阪神・淡路大震災の被災と復興支援活動の中であらためて問われた問いは、「教会とは何か」ということであった。実際、被災地域の教会は毎日の活動の中で、「教会は何ができるのか、できないのか、また何をすべきか、すべきでないか」、具体的な問題を前にしてその問いに答えていかなければならなかった。特に福音を宣べ伝えることと復興支援の働きとの関係について悩まされることが多かった。従来から「伝道と社会的責任」という教会の使命については学んではいたが、実際に「伝道」と「社会的責任」というこの二つがどのような関係にあるのかは充分に理解できてはいなかった。

あらためて創世記から黙示録までの聖書全体を読みなおすことから始めなければならなかった。それは教会や伝道というそれぞれのテーマについて聖書の特定の箇所を部分的に読むのではなく、天地創造から新天新地に至る聖書全体の枠組みの中で「教会とは何か」を問い直す作業であった。

当時、筆者は今回の研究会議に掲げられている「ホーリスティック宣教」と

いう言葉や概念について知らなかった。しかし、この世界の創造において「神のかたち」として造られた人間を、その後の堕落、救済、完成という聖書の語る神の贖いの御業の枠組みの中でとらえていく時に、全人的な人間の救いと回復について理解することができた。イエスキリストの十字架と復活により、私たちの霊的、肉体的、社会的領域を含む全人的な救いが与えられたとともに、私たちに新しい共同体が与えられた。これこそ教会であり、この共同体はやがて完成される。その時をめざして私たちは神の国の福音に生き、キリストの愛に生きる共同体を形成し、そしてこの地を治め管理する責任を果たしていくのである[8]。

これらのことが明らかにされた時、筆者はその信仰の背景として受け継いでいた聖化の信仰が豊かにされ、キリストの再臨を待望する信仰と宣教の働きをより積極的に受けとめることができるようになった[9]。

神の国をめざすイエスキリストにある新しいコミュニティは、この世にあってどのような働きをすることができるのであろうか。阪神・淡路大震災の被災と復興支援の働きの中から、福音による生き方の提示、コミュニティの提供、そしてネットワークの構築という三つのことがらをあげたいと思う。

Ⅲ. 教会は福音による生き方を提示する

人は危機を経験する時に自分の生き方を問い直す。

復興支援活動の全体は、初期の救急・救援段階から始まり、復興・再建段階におよぶ[10]。それは支援を受ける人にとっては、肉体的な必要が満たされることから、精神的、霊的また社会的な回復をめざしていくプロセスである。したがって最初は組織的なプロジェクトから始まるとしても、やがて人格的な関わりへと進むことになる。悲しみや怒りをともに共有し苦悩を互いに分かち合いながら回復へと進んでいく。そのプロセスにおけるコミュニティの役割は重要である。

その際、教会は福音による生き方を回復のモデルとして提示しなければならない。そして回復の場であるコミュニティを提供することを使命とする。本章では福音による生き方について三つのことを述べたい。

1. 助けを受ける[11]

被災地において、私たち教会は被災者であり同時に支援者となる。苦しみを受けながら同時に苦しみの中にある人に寄り添い、支えられながら同時に人々を支える者となる。

その場合、自分が支えられる存在であることを認めることは必ずしも簡単なことではない。家庭では「自分のことは自分でする」「人に迷惑をかけない」と教えられ、教会では「受けるより与えること」「仕えられる者ではなく仕える者になる」ことを学んできた者にとって、自分が助けられる側に立つことは抵抗を感じることであり、そのような存在となることに恥を覚える[12]。教会にとって救済や支援を考える時に自らを支援する側に置き、絶えず何ができたかを問うのであるが、しかし教会もまた「助けを受ける」者たちの集まりなのである。

特に被災地においては、「自分だけはなく」「お互い様である」という状況のために助けを求めることは容易くなるのであるが、それでも「助けて」という声が出されないために本当に必要な人に助けが届かないというケースも少なくない。とするならば私たちが日常において助けを受けることはどんなにむつかしいことであろうか。

創世記によると、人は「助け手」を必要とする存在として造られた。どんな人も「助けを受ける」ことが必要なのである。それは人が罪を犯した後に必要になったのではなく、「助け手」が必要な存在として創造されたのである。それゆえ、「助けを受ける」ことは私たちの回復した姿であり、また成熟した姿であ

---

[8] この作業のために多くの書物の助けを得たが、その中の一冊として、後藤敏夫『終末を生きる神の民』いのちのことば社、1990年、をあげておきたい。

[9] 震災から3年後に、筆者の所属する教会は「失われている人々をキリストの花嫁とするために、キリストにある新しいコミュニティを形成する」とその使命を告白し、「ニューコミュニティ」と教会の名称を新たにした。私たちは神の国に向かって完成を目指して生きるキリストのからだである共同体に連なり、キリストを愛しその福音を伝えて証しする使命に生きていくことをその使命文に表現した。

[10] 被災と支援の段階についてはⅤ章2を参照のこと。

[11] この項は「百万人の福音」1996年1月号に記した記事をもとにしている。

[12] 奥田知志「『助けて』と言おう」(シリーズ3.11後を生きる)(日本キリスト教団出版局、2012年)37頁

るといえよう。

2．ともにいること

3.11 東日本大震災直後の大阪大学の卒業式で当時の鷲田清一総長が式辞の中で co-presence という言葉を紹介した。式辞の一部を引用する。

「阪神淡路大震災のときに、わたしは当時神戸大学の附属病院に勤務しておられた精神科医の中井久夫先生から一つの言葉を教わりました。co-presence という言葉です。中井先生はこの言葉を「いてくれること」と訳し、他人の co-presence が被災の現場でいかに重い意味をもつかを説かれました。被災直後、中井先生は地方の医師たちに救援の要請をなさいました。全国から多くの医師が駆けつけたのですが、中井先生はじめ神戸大学のスタッフが患者さんにかかりっきりで、応援団になかなか交替のチャンスが回ってこない。そのうちあまりに長い待機時間に小さな不満が上がりはじめたとき、中井先生はその医師たちに集まってもらい、「予備軍がいてくれるからこそ、われわれは余力を残さず、使いきることかができる」と語りはじめました。そして、「その場にいてくれる」という、ただそれただけのことが自分たちのチームにとってどれほどポジティヴな意味をもつかを訴えられたのです。じっと見守ってくれている人がいるということが、人をいかに勇気づけるかということは、被災の現場だけでなく、たとえば子どもがはじめて幼稚園に行ったときの情景にも見られることです。子どもがはじめて幼稚園に行ったとき、母親から離れてひとり集団のなかへ入ってゆくときの不安は、だれもが一度は経験したはずです。ちらちら母親のほうをふり返り、自分のほうを見るその顔を何度も確認しながら、恐る恐るやがて仲間となるはずの見知らぬ他者たちの輪のなかへ入ってゆく…。人にはこのように、だれかから見守られているということを意識することによってはじめて、庇護者から離れ、自分の行動をなしうるということがあるのです。そしていま、わたしたちが被災者の方々に対してできることは、この見守りつづけること、心を届けるということです。」[13]

[13] http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/files/h23_shikiji.pdf

阪神・淡路大震災のボランティアとしてカナダから私たちの教会に来た高齢の夫妻がおられた。初めての日本であり言葉も通じない彼らであったが、自宅が全壊した一人の高齢の女性と出会った。彼らは毎日避難所から教会にやってくるその女性とともにお茶を飲み、ある場合はともに食事をしてこの女性を避難所に送っていく。筆者は彼らがこの女性を挟んでその肩を抱くようにしてゆっくりとした時間を過ごす姿を忘れることができない。言葉は通じなくても、彼らは人生の年長者として備えられた共感能力を備え持っていた。この女性は彼らがこの女性の悲しみや不安を理解することができることを感じたのであろう。そのためにともにいることで充分であったのだ。その後、この女性は立ち上がって新しい人生を歩み始めることができた。

このできごとは、救援の活動が具体的に何かの活動をすることや、何かを与えるということに偏りやすい中で、「ともにいる」という互いの存在にもとづく「忘れられていない」また「見つめられている」という関係が、回復の道のりを歩むために必要であることを教えてくれたできごとであった。

3．つながること

イエスキリストは私たちに新しいいのちとともに新しい共同体を与えた。それはともにつながって生きる人生である。新約聖書では「互いに」との言葉を繰り返して私たちの人生について教えている。

「互いに」とは、一方的にではなく相互に、すなわち相互依存の関係を教えている。復興支援の働きは、受ける者にとって与える者に対しての依存的な関係を造りやすい。しかし私たちに与えられた生き方は相互の関係でありつながる関係である。

もし私たちが互いにつながっていなければそこに一方的な関係ができる。東日本大震災の支援活動における教会の宣教について近藤愛哉が次のように述べている。

「震災後、キリスト者間で飛び交う言葉の中に『宣教のチャンス』『日本が変わるチャンス』『リバイバルのチャンス』というようなフレーズをしばしば耳にして違和感を覚え続けていた。嘆きや悲しみ、痛みが渦巻くただ中にあっては、

『チャンス』という言葉はあまりにも『キリスト者本位』の軽々しい言葉に思われてならなかったのだ。教会の宣教とは、本心を隠しつつ嘆く者に近付き、『痛み』を食い物にしながら進められるものでは決してないはずだ。むしろキリスト者一人ひとりが、直接与えられる関わりの中で仕え、痛みを共有することだ、と思わされていた。」[14]

従来、伝道の働きは伝える者から伝えられる者へと一方的な関係を土台に行われて来たのではないだろうか。それと同じ構造で支援の業が行われる時に、支援が伝道の手段としてとらえられることが起こる。私たちは隣人を自分や教会の目的や成長のための手段としてはならない。

Ⅲ．教会は小さなコミュニティを提供する

人だれでも所属するコミュニティを必要としている。

私たちがこの世に生まれる時、そこには小さなコミュニティが備えられている。私たちは父母を中心とする愛のコミュニティの中で育てられる。それと同様に、私たちがキリストにあって霊的に誕生しようとする時、神は私たちのためにコミュニティを備えておられる。それがキリストのからだでありまた神の家族である教会であり、私たちはその交わりの中で生まれ成長することができる。

そもそも人は交わりに生きる存在として創造されたが、神に背いた時に神との交わりが絶たれ互いの交わりは破壊された。しかしイエスキリストの十字架と復活によって新しい生命とその人生を生きるためのコミュニティを得たのである。そのコミュニティは愛と信頼の関係によって築かれるコミュニティでなければならない。そのようなコミュニティはおのずから少人数の交わりであることが要求されるだろう。そのコミュニティには次のような目的と性質がともなう。

[14] 「クリスチャン新聞」2011年9月4日

1．生きるためのコミュニティ

人はコミュニティにおいて「生きる」ことができる。

人は交わりの中で生きる存在として造られた。先に述べたように、私たちはコミュニティの中で生まれそこで育てられる。そこで助けを受け、そこにともにいることができる。そしてそこで互いにつながることができる。災害が私たちからコミュニティを奪う時、私たちは生きることが困難になる。

福島第一原子力発電所に一番近い教会であり、同原発の事故によってその地を離れなければならなくなった福島第一聖書バプテスト教会について、岡本知之は「ネーション・ステート」という言葉を紹介しながら「命が守られ得る共同体としての教会」として下記のように紹介している。

「私は、この書物[15]を読みながら、『この福島第一聖書バプテスト教会が、震災以降やってこられたことはいったい何であっただろうか』ということを考えました時に、ひとつはっきりと分かりますことは、命が守られ得る共同体というものをしっかりとそこに維持していくということ。…ところが、あの原発以降、みんながばらばらになってしまった。そこで何が崩れたか。一つのネーション・ステートが崩壊していったのだということ。それが原発事故を通して、この地の人々が現在直面している事態であります。ですから、仮設住宅をいくら造っても、それは最終的な解決にはならない。今、本当に建て上げられなければならないのは何かというと、仮設村落なのです。…

その現実に直面しながら、この教会は、ネーション・ステートとしての教会を守りぬくことをやってこられたわけであります。」[16]

岡本は、住宅が備えられながらコミュニティを奪われた人々の実例を紹介しながら、信仰によって形成されているコミュニティがその人々のいのちを守っていることを指摘している。

聖書は私たちが最終的にコミュニティにおいて完成されることを教える。教

[15] 佐藤彰『流浪の教会』いのちのことば社、2011年

[16] 岡本知之「教会は何を語っていくのか」『現代日本の危機とキリスト教』（日本キリスト教団出版局、2011年）117頁以降。

会はコミュニティを失っている人々に、いのちにつながるコミュニティを提供しなければならない。

2．回復のためのコミュニティ

人はコミュニティにおいて人として回復の道を歩むことができる。

以下は、震災後一年を経た時に日本国際飢餓対策のニュースに記した報告記事である。人がコミュニティにおいて社会的に回復するために教会が取り組んでいた姿を記している。

「阪神大震災から一周年を迎えて、テレビ、新聞を中心に様々な報道がなされました。その中で、最も関心を引いた番組の一つは被災地の子どもたち、特に親や家族を失った子どもたちの様子を特集したものでした。震災遺児の精神的、また肉体的な状況が震災直後よりもむしろ悪化していることが実例とともに訴えられていました。

震災直後より、Bさん兄弟が私たちの教会の交わりに加わられるようになりました。16 才と 13 才の女の子と 3 才の男の子の兄弟姉妹です。彼らは母親を震災で失い、父親と共に小学校に避難しているときから、私たちとの関係が始まりました。その後、仮設住宅に移り、今日までの一年余りの期間、私たちは紙面には書き尽くせない出来事を体験してきました。恐れ、孤独、不安などの内面的な問題、親子の関係、学校の先生との関係などの人間関係。また、仕事やお金に関する問題、その他あらゆることごとに取り組みました。自殺未遂を繰り返し、夜の街を探し回った時期もありました。

そんな中で、彼らの復興を助けるためには、彼らを迎える私たちが変わらなければならないことが次第にわかって来ました。私たちのあり方を変えなければ、彼らを受け入れられない現実に突き当たったのです。私たちの寛容の限界を超えてしまうことや、他の働きが妨げられるようなこともしばしばでした。

しかし、一年の期間が過ぎて、私たちはBさんたちについて心から主に感謝しています。震災によって母親を失った三人の幼い兄弟たちが、教会の交わりの中でともに育てられ、ともに神様を礼拝することができることは何と感謝なことでしょうか。途中で投げ出してしまわなくて良かったと神様に感謝します。

彼らとすごした一年間は、私たち西宮教会の震災後の働きが他に何一つできなかったとしても充分に感謝すべき事であると確信しています。…

震災は、私たちの日毎の生活を揺さぶりましたが、また私たちの生き方をも揺さぶったのです。

私は、復興支援や飢餓対策という働きは、特殊な事情や状況の人々を助ける働きというよりも、むしろ私たちの持っている体質を変化させる働きではないかと思います。誰かを愛そう。誰かを助けよう。そのように思うとどうしても私自身が変えられなくてはならないというところに突き当たります。本質的なところまで遡らなければ、復旧はできても復興はできないのです。」[17]

私たち教会が母親を失い家庭と住居を失ったこの子どもたちに与えることができたものがあるとすれば、それは私たち自身のコミュニティである。それは私たちの交わりの中に彼らを迎え入れることであった。

復興の目標は道路や建物などの復興ではなく人生の復興である。傷ついたからだと心と霊、そしてその人が失ったコミュニティを含む全人格的な回復のためにキリストのからだである愛と信頼にもとづいたコミュニティが備えられている。

3．成長のためのコミュニティ

人々はコミュニティにおいて成長することができる。

教会は私たちを成長させるコミュニティである。そこでは信仰と生活を別々のものとしない。むしろ信仰と生活の統合がなされる時に人は成長することができる。そのためには互いの関係において説明責任をもつコミュニティでなければならない。それぞれが属するコミュニティにおいて、互いに罪を告白し、互いに励まし合い、互いにゆるし合うとともに、お互いにアカウンタビリティが求められる関係となることによって信仰の成長を目ざすことができる。

コミュニティがそのような性質を持つためには少人数であることが求められる。少人数であってもその交わりの中では教会に与えられた礼拝、交わり、教

[17] 日本国際飢餓対策機構ニュース 1996 年 3 月号

育、奉仕、伝道の働きが行われる。それはあの震災の時に教会堂に集うことができない人々が、ともに集まり、ともに助け合い、ともに聖書を読み祈り合った姿の中に見いだすことができた。それは礼拝堂において会衆の一員であることからは得られないことである。

V．教会はネットワークを形成する

阪神・淡路大震災が起きた1995年は、一般に「ボランティア元年」と位置づけられている。従来のように特定の働き人ではなく一般市民が復興支援の働きに自主的に参加した。その流れは一過性のものに終わらず今日まで続いている。

その傾向はキリスト教会においても同様であった。私たちの教会においても従来の宣教活動では協力関係がなかった教会に属するメンバーがともにボランティアとして活動した。そのように幅広い協力が行われ「教派の壁が壊れた」と言われた。その姿は、福音宣教において従来の枠を超えた教会の協力と一致の可能性を感じさせる希望のある姿であった。東日本大震災の復興支援においてはさらにその協力姿勢が具体的に表わされた。

それは、教会が「キリストのからだ」として本来与えられている本質を取り戻す機会であり、またそのからだが有機的に機能するものであった。聖書はそのような教会の機能を「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられる」（エペソ4：16）と語っており、教会はそのような「ネットワーク」を形成する。

そのようなネットワークとしての教会の性質について、その公同性、多様性、そして将来性について述べたい。

1．教会を代表する地域教会

阪神・淡路大震災の一年後、筆者は事務局長として奉仕していた近畿福音放送伝道協力会の機関誌に次のように記した。

「…過ぎし一年は、近放伝の事務局の働きを担わせていただいている者として、また被災地域の教会の一牧師として、主の教会を建て上げる業について多くを考えさせられる時でした。

一つには『教会を構成する生きた細胞』ということです。実際に震災直後は、会堂が無傷でも、牧師がいくら頑張ってもどうしようもない状況でした。教会が活きた細胞によって構成されていなければ対応できないのです。日曜日だけのクリスチャンや日曜日だけの教会では、危機的状況にはたえられないのです。私たちが建て上げる教会の姿、それはまさに『近畿宣教教会会議』で教えられたような細胞教会と弟子化にあるように思います。

二つ目のことは『キリストのからだとしての一つの教会』ということです。私たちが『自分の教会』という意識を持つことは決して悪いことではありません。しかし、あくまでもそう思っているのは私たちだけであって、一般社会の人々にとっては「教会」はただ一つなのだということこの危機的な状況の中で痛感しました。…」[18]

キリスト教会には教派が存在するが、一般の人々にとってそれらはすべて「キリスト教会」である。危機の状況におけるほど人々はそのような強い印象をもって受けとめるのである。

従来の教会協力には「自分の教会のために益となる」という動機がそこに強くあると思われる。しかしこの震災復興の働きにおいては、「相手のために」から「お互いのために」という姿勢が強く表れるようになったと思われる。実際、被災教会に派遣されたボランティアは本来の所属教会のメンバーとしてではなく被災地の教会のメンバーとして人々に仕えた。

このことは教会の公同性についてあらためて考えさせるとともに、教会の公同的な使命である社会的使命をどのように行なっていくかという具体的な課題も明らかにしている。教会がその一致を確かなものとしそのネットワークを機能させていくためには、次に述べるように教会の多様性を互いに理解することが肝要である。

[18] 近畿福音放送伝道協力会「福音の光」教会版1996年1月号

2．多様な道を歩む地域教会

大規模災害における復興への道のりは長期にわたる。被災地の人々や教会はそれぞれ異なるプロセスを歩んで回復を目指していかなければならない。そして、その時にそれぞれがおかれた状況によって互いのつながり方には変化が生まれることになる。

この項では、まず被災と支援の段階を便宜上 5 つの段階にわけて考えてみたい[19]。

第一段階は、震災直後の「救急段階」である。

何よりも肉体的な生命を助けることを第一とし、その上で食事や睡眠などの最低限の環境を確保することが目的になる。

この段階の支援は、そこにいる人々と専門チームによって行なわれる。国内外の教会は祈り、被災地の状況の確認と把握に全力を尽くし、援助の備えを行う。この段階においてインターネットやソーシャル・ネットワーク・サービス(SNS）によって得られる情報は、現在は阪神・淡路大震災当時とは比べものにならない。東日本大震災直後に筆者は facebook によって知人の安否を確認し、緊急の応援を依頼することができた。しかし同時にチェーンメールや誤情報についての課題も残した。

第二段階は、一週間から一ヶ月を目安とする「救援段階」である。

水道、ガス、電気などのライフラインの復旧と緊急物資支援が中心となる。援助団体や教会/教団などがそれぞれ救援組織を立ち上げて被災地への支援を本格的に始める。

この段階から、その後の復興支援のために重要になることは、各団体や教団などの持つ被災情報や支援情報を一元化することである。どこに支援の必要があり、どこに支援する人や力があるかを「見える化」することによって、支援の片寄りを防ぎ効果的な支援を行なうことができる。

第三段階は、一ヶ月から半年を目安とする「復旧段階」である。

仮の住まいとそのための物資や経済的援助が行われ、新しい人間関係と共同

[19]この内容は『クリスチャンハンドブック 2012』（クリスチャン新聞、2012 年）に記した記事にもとづいている。

体を構築していくことが目標となる。すべての人々が同じ状況におかれていた震災直後の状況から、それぞれが復興に向かう道を歩み始める段階である。同時に、復旧の土音が響くようになると、PTSD などの心の問題が課題となってくる。 また支援者のケアも必要となる。 一般的なボランティアの働きとともに、個人的な信頼関係や絆を土台にした援助、また専門家の協力を得た働きが必要になる。

第四段階は、半年から数年を目安とする「復興段階」である。

新しい生活や仕事が始まり日常的な生活にむかって歩み始めていく。しかしそれは同時に被災地域や人々の間に較差を生じさせる。各部分の復興とともに相互的な復興をめざすための援助が必要となる。

この頃になると当初の支援態勢が一段落して、被災地に対する社会の関心が薄れていきやすい。阪神・淡路大震災の場合は、震災二ヵ月後の地下鉄サリン事件をきっかけに報道を始め社会の関心が被災地から離れた。そのことが被災者の精神的な痛みを大きくしたように思う。

第五段階は、数年から 20 年を目安とする「再建段階」である。

被災と復興の歩みの中で受けた悲しみや痛みに対して全人格的な回復の道をたどりながら、新しい人生、教会、地域を創造していく。被災者が自分の人生を自分自身で受けとめていくことができるように、また被災した教会が相互に支え合いながら復興していく姿をめざしていく。

最初にも述べたが被災地の状況は多様であり流動的である。このような区分けにはあてはまらないこともあるに違いないし、その段階が後退することもあるかもしれない。しかし適切な支援を行うためにはそれぞれが現在置かれている状況と歩んでいるプロセスを把握することが必要である。

阪神・淡路大震災で被災者のケアにあたった精神科医の中井久夫によると、地震の二ヶ月後あたりから人々の間に生まれたある変化に気がついたという。苦難の中でも元気になっていく人と、ますます引きこもってしまう人の違いが目につくようになる。状況に対して柔軟に対応していく人と、考えられないほど頑固になる人、仲が良くなった夫婦とヒビの入った夫婦、そのわずかな差が日を追ってますます大きくなり、まるで開いたはさみの刃のように時とともに

広がっていくという。中井はそれを「鋏状較差（きょうじょうかくさ）」[20]と呼んだ。

初期の救援段階においてはすべての人々が同じ状況の中に置かれるためにそれぞれのちがいを超えて一体感を覚え、互いに共感や分かちあいの関係が生まれる。ただしそれは築かれた関係ではなく一時的な関係にとどまることが多い。

やがて時間の経過とともに復興段階に入るとそれぞれの状況に違いが生まれるようになる。それぞれが異なる状況と課題に直面するようになり、互いの隔たりが明らかになる。その中で、自分の状況に変化が見られない人は「忘れ去られているのではないか」という恐れや焦りを感じるようになり、復興の道のりが見え始めた人は「早くこの状況を脱出したい」という願いを抱くようになる。特に後者の場合、これまでとは正反対に現状に対して無関心になる人々も起こる。避難所の生活では家族同様の親密な関係を持っていた人が、避難所を出た途端にそこでの人間関係をきっぱり捨てて新しい人生を歩み出す例も多い。

同様のことは被災地の教会の間にも起こる。この較差は、被災の状況の違い、持っている人脈や受けている支援の違いなど、様々な違いによって拡大していく。被災直後特有の一体感を経験した直後だけに、その較差の与える影響は大きくなる。震災後しばらくして、復興の道を歩み始めた教会は通常の働きを再開するだけではなく、その機会を活かしてその遅れを取り戻すかのように活発な宣教活動を進める場合もある。しかし一方で依然として状況に変化のない教会の中にはすべての働きを止めて門を閉ざしてしまう教会もある。その結果、互いの間のちがいが際立つことになり、復興支援の働きが一段落したところで互いの関係にむつかしさを残す場合も見られた。

教会は「キリストのからだ」であり、「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです」（Ⅰコリント 12：26）とあるように、互いのおかれた多様な状況にそれぞれが関心を持ちつつ、からだ全体としての復興をめざしていくことが大切であることは言うまでもない。

[20] 中井久夫『復興の道なかばで』（みずず書房、2011 年）110 頁

3．将来を共有する地域教会

教会においてはこれまで「危機管理」[21]というテーマに取りくむ機会は少なかった。危機管理は起こりうる危機に対する「リスク・マネジメント」と実際のできごとに対処する「クライシス・マネジメント」に分けることができるが、この両方の分野での教会の協力が必要である。特に教会が地域社会にあって果たすべき責任を考える時に、ネットワークを構築してこれに取り組んでおくことは重要なことである。

実際の危機管理には、リスク・マネジメントの段階として「危機の予知予測」、「未然防止に向けた取り組み」、そしてクライシス・マネジメントである「危機発生時の対応」、「対応の評価と再発防止に向けた取り組み」の四つのプロセスがある。

第一の「危機の予知予測」については、可能性のある課題を把握して、「緊急対応ガイドライン／マニュアル」を整備しておくことが必要であろう。それによって、教会や教団における対応の判断基準、手順、責任の所在を明確にしておく。これらは実際にものごとが起こってからでは間に合わないことだからである。

第二の「未然防止に向けた取り組み」について、今回のような震災や津波に関してはあてはまらないと考えるかもしれない。しかし、そのような自然災害がもたらす二次的災害について考えるならば、地域教会のネットワークを日常の働きの中で機能させておくことが必要ではないだろうか。

第三の「危機発生時の対応」についても、今回のように想定をはるかに超えることが実際には起こり得る。しかし、重要なことは冷静な初動である。災害時に混乱する中で正確な情報収集と判断が重要になることは言うまでもない。

最後の第四段階は、「対応の評価と再発防止に向けた取り組み」である。できたことやできなかったことを含めてありのまま記録し評価を加える。それがそのまま再発防止への取り組みとなるからである。

[21] ここで紹介する内容は『クリスチャンハンドブック 2012 年』(クリスチャン新聞、2012）に教会の危機管理について記した記事にもとづいている。

阪神・淡路大震災から今回の東日本大震災およびそれにともなう福島第一原発事故にいたるまで、私たちが自らの課題として考えるべきことは「なすべきことをしない人間の罪」についてである。なすべきことがなされないことは、致命的な問題を起こすことになる。それは政府をはじめとする行政においてだけではなく教会においても同様ではないだろうか。

聖書は「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です」(ヤコブ4：17) と語っている。もちろん誰もがこの「なすべき正しいこと」を知ることができるわけではない。また、それを行わない罪はだれの目にも明らかなことではない。それゆえ、それを知らされた者の責任は大きい。

それゆえ、リスク・マネジメントにおいて重要なことは、その責任に耐えうるリーダーを養成することである。未経験の状況の中で行うべきことを判断してそれを行うことのできる洞察力と実行力が求められる。同時に高い献身度と倫理観を備えたリーダーを育てること、これは教会がネットワークとして取りくむべきことがらである。

さいごに

与えられた「神の国のホーリスティック宣教」という課題について、阪神・淡路大震災にける被災と復興の歩みの中で考えて来たことを述べた。

被災地におかれた教会とクリスチャンにとって、神の愛を証しすることは福音を伝えることと切り離すことはできない。また互いの関係を形成することとも切り離すことはできない。したがって、復興の働きは神の国の福音について思い巡らす機会であり、大震災という危機的な状況の中で終末的な神の国における公同教会の特質を意識しながら、地域教会の性質と働きを問い続ける歩みとなった。

教会が社会と人々に対して貢献しようと願うなら、その規模や活動によって評価されようとするのではなく、主が教会に与えられた使命へと焦点を合わせなければならない。それは人々に福音を証しするために、キリストの愛による

コミュニティを提供することに他ならない。そこにおいて人々はホーリスティックな福音へと招かれ、神が創造において与えられた姿へと回復の道を歩み始めることができ、そして人々は新たなコミュニティを社会において再生産する。そのように福音のあかしと愛のわざは人とコミュニティにおいて統合される。そこから家庭や社会のあらゆるコミュニティの回復が始まっていくのである。

研究会の発題として渋々引き受けたものが、このように公に記すこととなってしまった。誤ったことがらや不十分な内容があるに違いない。しかし、筆者の、阪神・淡路大震災を経験して「たとい見える状況が震災以前の状態に復旧しても、もはや震災以前と同じ歩みを繰り返すことはできなかった」との思いについては、共感をいただけるのではないかと思う。

日本における福音宣教のために、日本の教会が新しくされなければならない。小さな経験をそのための話題の一つとしていただけるならば、あの大震災の苦しみをともに生きた者としてこれ以上の喜びはない。

(基督兄弟団・ニューコミュニティ牧師)